

# 政治漫画に見る内閣

——選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣——

茨木正治

- I 問題の所在
- II 研究動向
  - (1) フレーミング研究
  - (2) 政治漫画研究
- III 内容分析
  - (1) 分析方法
  - (2) 分析結果と考察
    - 1 選挙の経緯
    - 2 森内閣と総選挙
    - 3 小泉内閣と参院選挙
    - 4 森内閣と小泉内閣
- IV 結論と課題

## I 問題の所在

いわゆる「――内閣（政権）」を評価するとき、メディアを介在しないで評価することは難しい。「内閣（政権）」が政策を実施するときでも、そのような「現実」が構成され、政策決定者のみならず、一般市民においてもメディアという「象徴的現実」を構成する要素が関わってはじめて「政策」は「主観的」現実として登場する。

このことは、個別の「政策」だけでなく、「内閣（政権）」全体の評価にもあてはまる。個別の「政策」評価の集合に、ある種の「イメージ」が付加されて「内閣（政権）」全体の評価が形成される。本稿は、この「イメージ」の形成の過程に注目することによって、「内閣（政権）」全体の評価をとらえる足がかりを求めようとするものである。このために具体的には、「選挙」という特定事象を扱う。「選挙」は、意見や価値の表出、政党や候補者への支持にむけての意見統合、政治的リーダーの補充、などの諸機能のほかに権力の正当化機能がある。代表的民主主義において、主権者の意見の集約と権力の委託によって権力の正当化が行われる。この正当化はシンボルによって行われるから、「内閣（政権）」がいかに自らの「イメージ」を形成し有権者の支持を得ることができるかは、「内閣（政権）」評価の一つの要素とみなすことができる。

メディアとして本稿では、「政治漫画」を分析対象とする。その理由は、「政治漫画」は、文字と画像との複合されたメディアであり、掲載される新聞との関係が比較的独立しており、人物に重点が置かれる点が、「内閣（政権）」イメージにおける首相のパーソナリティーと深く関わる可能性を持っているからである。

本稿では、事例として、第一次森喜朗内閣（二〇〇〇年四月五日～七月四日）と小泉純一郎内閣（二〇〇一年四月二六日～）を取り上げる。同一派閥に属している森と小泉の両氏が、支持率では対照的な立場をつくりあげている、これは、個別政策の問題というより、パーソナリティーを含む「内閣（政権）」イメージの差異によるものでは

ないかと考えられる。では、いったいどこがどのように異なっているのか。「選挙」における正当化形成過程に違いがあるのかどうかを明らかにすることを試みる。このとき、「中央」と「地元」ではイメージに温度差があることが予想される。その違いは何かを検証する。

## II 研究動向

### (1) フレーミング研究

社会的出来事をどのように認識し、行動の基準とするかについては、様々な見解が様々な分野で述べられてきた。認識枠を「フレーム」という言葉で述べることにしても、その出自からして社会学や社会心理学の領域において異なっている。「日常生活の経験を体系的・組織的に整理する枠組み」(Goffman, 1974)、「メッセージの集合であり、カテゴリーを画する外枠」(Bateson, 1972/2000)という規定から、コミュニケーション行為におけるフレームの重要性を見い出すことができる。個人の情報処理の諸概念（スキーマ、スクリプト）からより一般的な認知のメカニズムを探ろうとするのが社会心理学のフレーム認識であるとすれば（鳥谷2001・竹下, 1998）、個別具体的な事例研究をもとに、情報の送り手における社会的現実の意味付けとそれを生み出す社会的諸要因を考察しようとしたのが、社会学のフレーム概念の特徴であった。たとえば、タックマンは、ニュースの社会的構成過程のなかで、日々の出来事がニュースになるための要素としてフレーム、フレーミングをとらえ（Tuchman, 1978/1991）、「ニュースフレーム」の概念を構築した。ギトリンは、「ニュースフレーム」が特定のシンボル装置によって構成されることを指摘し、ジャーナリストの情報処理と加工の結果受け手（読者・視聴者）に伝達されるとき「ニュース言説の組織化に伴う認知、解釈、表現、選択、強調、排除のパターン」を「メディアフレーム」と呼んだ。このように、ニュース生産の過程の「送り手の」社会的意味付けの根拠（二狭義の「メディアフレーム」をフレーム概念の中

心にしているのが社会学のフレーム研究の特徴である。

## (2) 政治漫画研究

事実の意味付けによる現実構成力を持ちうるメディアとして、新聞には活字メディア、画像・写真メディアとならんで、政治漫画がある。コトル (Cottle) は、写真における研究を4つの分類に整理した (Cottle, 1998) が、政治漫画を画像情報とみなせばこの分類が適用できる。その結果は以下になる。

画像の認識の中立性に疑義を唱えた、「現実の歪曲」については、政治漫画の特徴である「デフォルメ」、戯画 (カリカチュア)、絵画技法に言及した研究 (Harrison, 1982) があたる。コミュニケーションとしての政治漫画を軸に、表現の複雑さを「デフォルメ」「カリカチュア」が瞬時理解を助けているとハリソンは述べている。特定の事例を分析対象として、シンボルの形をとった内容が画像を規定する、「シンボル」ないし「記号論」研究では、前者はいわゆる「分析道具としての政治漫画研究」(茨木、1997) が該当し、歴史的事実やトピック、政治社会の出来事を取り上げた政治漫画の分析があげられ、加えて、それによって人間の心理 (攻撃・ユーモアなど) や、社会構造、歴史意識などの解明に向けた研究がある。後者と組み合わせた研究として、政治漫画の「文法」の必要性を説いた研究 (H. L. Smith, 1954; Streicher, 1965) など、それに呼応して具体的な枠組みを示した「政治漫画のレトリック研究」(Medhurst & Desousa, 1981) がある。受け手の認識に影響を与え、画像が報道の正確さの権威づけや正当性の根拠となることを示す、「認識論的研究」では、政治漫画を漫画家と編集者との「合作」とみなして、彼らの相互作用から漫画家の自律性を推論する研究 (Riffe, 1985, 1987) が興味深い。漫画家が「第ゼロ次の読者」である編集者とのせめぎ合いを通じて、いかに自らの価値判断や意思を作品に反映させるかを明らかにしようとするからである。こうした「送り手の認識過程」を見る研究は政治漫画ではあまりみられていなかっただけにライフの研究

は意義がある。

### Ⅲ 内容分析

#### (1) 分析方法

二〇〇〇年六月一日から六月三〇日まで、および二〇〇一年七月一日から七月三十一日までに「朝日新聞」（以下「朝日」と略記）に掲載された「政治漫画」五一枚（二〇〇〇年二五枚、二〇〇一年二六枚）について、学部学生三人に「選挙」（総選挙）と「参院選挙」をテーマとする「政治漫画」を選ばせた。彼らが共通に選んだ「政治漫画」二〇枚（二〇〇〇年七枚、二〇〇一年一三枚）を対象に、以下の点に留意して分析を行った。

① この選んだ「政治漫画」の「下位テーマ」を、上記期間の「朝日」の記事・論説から抽出した。

② そのとき、シンボル化しているもの（されているもの）について考察した。

③ ①で抽出した「下位テーマ」について、「総選挙」では「北國新聞」（以下「北國」）、「参院選挙」では「神奈川新聞」（以下「神奈川」）を用いて、対応する記事・論説を分析し「朝日」と比較した。

④ 「政治漫画」の表記は（00／01、月、日）とし、対応記事は（00／01、月、日、掲載新聞名、M／E）と表記した。なお、「北國」には共同通信配信の「政治漫画」が掲載されているので、それを使用するときには「00／01、月、日」と表わした。

#### (2) 分析結果と考察

##### 1 「選挙」の概要

二〇〇〇年六月二日、衆議院が解散された後、同月一三日に公示、二五日に投（開）票が行われた第四二回衆議

院選挙（「総選挙」）は、自民党、公明党、保守党の与党三党が、選挙前勢力三三一議席（自民二七一、公明四二、保守一八）を大幅に減じたものの、衆院の全常任委員会委員長を占め、過半数も取れる「絶対安定多数」二六九議席を超える二七一議席（自民二三三、公明三一、保守七）を確保した。自民党は大幅に議席を減らした一方、民主党は改選前の九五議席から一二七議席と躍進した。投票率は、小選挙区において六二・四九パーセントとなり、戦後最低であった前回一九九六年一〇月の総選挙の五九・六五パーセントを上回った。「神の国」「国体」発言で物議をかもし、各世論調査で支持率が低迷していた森喜朗首相は続投し、翌月第二次森内閣が成立した。

二〇〇一年四月二六日に森氏の後を受けて、第八七代首相に選出された小泉純一郎首相の初めての国政選挙となる、第十九回参議院選挙が七月一三日公示され、二九日に投票、即日開票された。各種世論調査で七割以上の高支持率を誇る「小泉人気」に乗った自民党は、改選議席一二二議席の過半数を超える六四議席で大勝した。与党三党は、七八議席（自民六四、公明一三、保守二）に達し、非改選も合わせた全議席（二四七議席）の過半数を超える一三八議席（自民一一〇、公明二三、保守五）を確保した。社民党・共産党はそれぞれ議席を減らした。投票率は五六・四四パーセントで戦後三番目の低さであった。

## 2 森内閣と総選挙

二〇〇〇年の第四二回「総選挙」をテーマとする「政治漫画」は、六月に掲載された「政治漫画」の総数（二五枚）の半数以上の一三枚であった。この月は、政治家、皇族の死去が相次ぎ（六日、梶山静六元官房長官、一六日、良子皇太后、一九日、竹下登元首相）、国際関係では、南北朝鮮首脳会談が初めて開かれた（一三―一四日）以外、主に内閣を巡る動きが「政治漫画」のテーマを形成した。失言が相次ぐ森首相の資質と成立過程に疑いをなしとしない、広義の「正統性」への疑義をもちつつ迎えた「初めての正当性確保の機会」が、この「総選挙」であっ

た。こうした政権の不安定性が、新聞に登場した「政治漫画」の五割強のもののテーマとなりうる原因となったのである。

二〇〇〇年六月において、「総選挙」をテーマとする「政治漫画」は（表1）のようになった。なお、表には「政治漫画」に記されている「キャプション」を提示した。

これらの「政治漫画」に付随するサブ・テーマは、「衆院解散」（内閣不信任案否決）―「公示」―「選挙運動」―「投票依頼」―「開票」といった、「衆院選挙」の手続きに関するテーマ（「選挙」のステレオタイプを示すテーマ）と、長老議員の引退、世襲議員など選挙一般に関わるテーマ、などの①「政治常識」を取り上げたものの、②森首相の「人柄」（パーソナリティ）に関するもの（失言・放言とその影響）、③「時事的」なテーマ（小淵恵三前首相自民党葬など）を扱ったもの、に分かれる。その比率は、①六枚、②六枚、③一枚と、「政治常識」と首相の「人柄」とがほぼ半数を占めている。ここから、森首相個人の性質に大きな関心が払われていることがわかる。さらに、①のテーマと②のテーマとが重複しているものが一枚あることからみると、②の「人柄」がこの時期の政治漫画にかなり影響を与えていることがわかる。

森首相が登場する「政治漫画」は一三枚中一〇枚と、首相が「政治」を象徴するという「政治漫画」の原則をふまえている。単に登場数からでは、森首相の個性が強調されている

（表1）「衆議院選挙」をテーマとする「政治漫画」

00・6・1	もはや神の国のまま天の岩戸を開けるしかない？
6・2	出陣の火祭だァ！
6・4	サクラ チル―桜内元衆院議長引退へ
6・7	失言同時修正機能マイク
6・9	ハッ、気のせいか
6・11	お題「唇・風」
6・13	こりやますます「ドロ沼」だ政策論争
6・15	「甘き生活」？いや「甘き選挙民」だな、ジイ
6・22	無党派に無神経な一言
6・23	あと二日……
6・24	最後の最後のお願ひ……
6・25	無党派層の皆さまへ……
6・27	65議席kgも減ろうとは

とは言えない。しかしながら、この一〇枚が、上述した分類の①から③のすべてにわたってかわっていることをみるならば、ここにおいても「失言」「世論調査による支持率の低さ」などが「政権の命運を握る」とまでいわれたことを端的に表わしていると言えよう。

また、森首相の「人柄」の影響力は、いわゆる選挙の定番の舞台装置である、選挙本部、ダルマ、たすき、街頭演説車などの事物によって選挙をシンボル化させる効果への依存を弱めていると見られる。というのは、「失言」を恐れる候補・陣営が、森首相の応援に二の足を踏むために、「失言」を想起させるシンボルを提示するだけで、選挙がまず認識され、その次に「定番」によって読み手の認知の正しさが確認されることになったからである。

ところで、「総選挙」と「政治漫画」がどのようなトピックで接合されているのかを以下個別に分析する。

森首相の登場した「政治漫画」は、ほとんど彼のパーソナリティと組み合わせた作品となっている。たとえば、(00・6・1)は、与党としては「景気、サミット」を争点にした解散と銘打っているが、実際には五月一日神政連で森首相が発した「神の国」発言が元になった解散であることを、「天の岩戸」(＝総選挙)を開けることでしか局面を開くできない政府の対応を描くことによって明らかにしている。(00・6・2)は、内閣不信任案を採決せず解散することで、「出たとこ勝負」の執行部の姿勢がみてとれる。その中でも、森首相は就任時の関係そのまゝに、執行部主導の「傀儡」として「天の岩戸」を開けようとしていたり、「解散」のうちわを持つ野中広務幹事長・青木幹雄官房長官と「並んで」踊りだしたりしている。ここに、首相のリーダーシップの不透明性がみられる。岩戸を開ける「役割」、「不信任決議」の焼却に関わる「役割」を森首相が担当しているのは、副次的な業務を行なう「役割」を自ら体現しているのであり、それ以上でも以下でもない。また、政治日程として「総選挙」が既に決められていた。それは、九州・沖縄サミット前に、小淵恵一前首相の「同情票」(00・6・9)の「政治漫画」では、前日の小淵前首相の内閣・自民党合同葬に献花する森首相は、背後にダルマが自分に同情票を持ってきてくれると



いう幻想を抱くシーンが描かれている）が見込まれるうちに、衆院を解散し「総選挙」を行うということであった。こうしたことを企画したところで、それは執行部だけの了解であつて森氏は「疎外」されているとみることができ

る。そうした「疎外状況」の打破を試みようとして、自らが「発言」すれば「失言」する。「失言」を執行部が尻拭いする。党首自身の不安定さと執行部との軋轢が、自党の候補者には不安に映る。その結果が、(00・6・7)における、街頭演説を「青木幹事長スピーカー」が「翻訳」しなおして伝えるという構図や、(00・6・23)の、演説中の森首相のそばにあるダルマの口をテープでふさいでしまうことや、この日のキャプション「あと二日」にも端的に表われている。すなわち、(00・6・23)は、選挙戦が客観的に残り二日だという、終盤戦の追い込みの「選挙の定番の風物詩」と見ることもできる反面、森首相の「失言」が票の減少につながるといふ候補者や支持者達の「忍耐」も「あと二日」で終了することをも意味している。このような「失言」への不安については、(00・6・6M)の記事が「森首相遊説に腰引けがち 12県要請せず 波風避けたい」という自民全国幹部の声を紹介することとで「政治漫画」の主張を裏付けていることにもみられる。さらに、(00・6・23M)において、「沖縄万博・IC革命・ただ今昭和十二年 首相語連発」という見出しで、首相の「発言」がイデオロギー的な「失言」ではなく、事実誤認による「失言」をも乱発した結果であるとみなしている。これは、首相としての資質にまで言及していることになり、こうした認識が「政治漫画」における「失言」と党内での「疎外」の描写の多さの背景にあると考えられる。

かくして、「疎外」ないし「資質への疑念」を想起させるメディア報道は、森首相にさらなるプレッシャーを生じさせる。(00・6・21)は、前日(六月二〇日)の講演で「関心ないといって寝てくれれば」という新たな「失言」事件を生じさせてしまったことを描いている。同じ日の「無党派層が五二・七割「態度未定」という記事

からも、森氏の「発言」は「失言」では済まされないほどの重要性を持っていたのである。(00・6・22)は、そうした無党派層への影響を懸念した作品といえる。拡声器で「寝てろ」とする矛盾がこの「政治漫画」の主張をより鮮明に表わしている。

ところで「総選挙」の「政治漫画」から抽出された、森喜朗首相の「人柄」が、「地元紙」である「北國新聞」ではどのように扱われているのであろうか。

ここでは、分析素材として「北國」に掲載された「政治漫画」も対象としている。それは以下の理由による。この「北國」にも掲載されている「政治漫画」は、協同通信社配信のものであり独自の作品ではない。したがって、厳密には「中央紙」の「政治漫画」と比較の対象とすべきではない。しかし、この配信された「政治漫画」の「北國」への掲載が不定期であることから、「北國」による選択が行われていると判断し、便宜上「地方紙」の思惑が推測可能であるとみなし、分析の素材とした。

(00・6・1)および(00・6・2)の「神の国」解散については、「北國」は「神の国はごく普通の発言」という、電気通信大学教授西尾幹二氏が根上町での森氏後援会主催において行った講演での発言を紹介している(00・6・1M)。また、「時鐘」―「朝日」では「天声人語」に相当する紙面にあるコラム―で、「神の国」発言は首相個人の失敗を自民党全体の体質にする「減点ゲーム」が「政治の見せ物化」の帰結として生ずると論じている(00・6・4M)。また、「政治漫画」においては、「衣替え」という見出しで、自民党県連の議員が、森氏の着ている神話時代の衣装を脱がそうとしている様子を描いている(00・6・1)。この中で、県議に「その古着をクリ―ニングに出したほうが…」と言わせている。「神の国」では選挙戦を戦えないという現実的対応なのか、県議が困惑する様子からみれば上述した「北國」の記事の姿勢とは一定のバランスをとったものであることがわかる。

このような「政治漫画」によってバランスをとる感覚は、「朝日」の(00・6・7)の「政治漫画」の背景とな

った、森首相の「国体発言」への対応にも表われている。六月三日夜、奈良市で衆院解散後初の演説会に望んだ森首相が、共産党批判の中で、「（共産党では）日本の『国体』を守ることができるのか」と発言した。これに対して野党は四日一斉に反発し、与党内でも自重を求める声が出て、首相も「失言があった」と認めた。しかし、「国体」発言そのものの釈明はせず、自民党は事態收拾に困惑した。こうした「国体発言」を受けて「北國」は、「軽量総理」という見出しの「政治漫画」が掲載された「00・6・6」。これによれば、「神の国発言」「国体発言」などいくつかの風船を持った巨体の森首相が、計量秤に座っている。その「軽さ」に衆人驚くという構図になっている。森氏の巨体と諸「発言風船」の軽さの対比から、「森隠し」に躍起になる自民党の結果と諸「発言」の「軽さ」の両方が読み取れる「政治漫画」である。こうした、「政治漫画」および記事を掲載する一方で、六月六日の一面で、北國新聞社独自の電話調査結果を掲載している。それによると、「森内閣支持率は四七、五％」であり「先月（五月）の全国調査上回る」と述べている。また、「神の国」発言についても、「（重視する）二二％」、「（重視）しない六七％」という見出しを掲げ、諸「発言」に寛容な地元の意識を紹介している。

六月二〇日の新潟での「（無党派層は）寝ていて」発言については、「寝てろ」と叫ぶ「朝日」の「政治漫画」（00・6・22）よりもよりソフトに、「投票態度未定三五％」の見出しの新聞を広げて横になっている「オヤジ」に向かつて、子守唄を歌っている森首相の姿を描いている「政治漫画」を掲載している「00・6・22」。この「政治漫画」は、「寝ててほしいのは、この子よー」と、選挙運動の宣伝車の騒音に泣き止まない赤ん坊に、いらだつ母親と「子守唄の森首相」のトボけた様子を対比させている。この「政治漫画」は、共同通信社が行った全国政党支持率調査の結果から、無党派層がトップになったことをとりあげ、「無党派層が（衆院選の）勝敗左右」とする見出し記事に併設されたものである。「総選挙」の終盤の投票動向予測を焦点とした、紙面構成の一環として、この「政治漫画」を位置づけているとみられる。したがって、「国体発言」のようにあえてバランスをとらず、より大き

(表2)「参院選挙」をテーマとする「政治漫画」

00・7・7	骨太改革「選挙が済むまであまり出さんでよ」
7・8	議席守れるか！悲壮保守党「えっ！看板の字違ってる？」
7・13	サーフィンの技をお見せするのは、あの先だね
7・25	あと4日 参院選燃ゆ
7・26	暗雲2個
7・29	きょうですよ！投票日
7・31	参院選・風速6 4票メートル
( 8・1	個人メドレー )

な政治儀礼の一つに包摂させた結果になったとみることができる。

### 3 小泉内閣と参院選挙

二〇〇一年七月の「朝日新聞」に掲載された「政治漫画」は二六枚であった。この月は、ジェノバ・サミット、COP6などの「国際(関係)」をテーマとするものが続き(六枚)、外務省と外務大臣との確執をあらわした「省庁」テーマが四枚、日米首脳会談の模様を描いた「外交」が三枚と多岐にわたっている。そのなかで、「参院選挙」をテーマとしたものは、七枚(約二七パーセント)を占め、項目別で最多であった。このこととあわせて「選挙」テーマにはそれ以外の選挙を扱ってはいなかったから、「参院選挙」が主要な関心事であったことがわかる。

「参院選挙」をテーマとする政治漫画のキャプションは、(表2)のとおりである。

この七枚において、「参院選挙」に付随(組み合わせ)されているテーマは、「構造改革を脅威と感ずる自民党候補」「保守党存続の危機」「自社(朝日)調査による小泉人気」「選挙後の政治・経済情勢(株価低迷・靖国参拝)」「選挙結果による小泉効果と、革新、勢力の衰退」といった政策・内閣・政党に関わる時事的なものと、いわゆる選挙一般を「ステレオタイプ」的に表現したもの(「街頭演説」「投票所への喚起」)に分けられる。上記のように七枚の政治漫画のうち、小泉首相が登場したのは五枚と、七〇パーセントに達している。しかし、この割合は必ずしも高いものではない。また、これから小泉首相への好意度の高さをみることもできない(ちなみに二〇〇〇年の「衆院選挙」における森喜朗首相の登場比率は、一三枚中一〇枚で、約七六パーセントである)。政治漫画において特

に政治過程のテーマでは、首相や大統領といったリーダーが登場する頻度はきわめて高い。政治現象を認知させる「有名人」として、確固たる「当事者」がいない場合、これらの人が「適任」である（ほかにいない）からである。「選挙」を象徴する事物としては、ほとんどすべての政治漫画に使用されている。候補者の襷（たすき）、選挙対策本部（詰め所）、候補者ポスター、看板、ダルマ、政党のスローガン、などである。こうしたシンボルのほかに、「政治」そのものを象徴する「国会議事堂」のようなものを含めて「参院」選挙テーマを読み手に想起させる「主題設定」のレトリックである。「政治常識」が当該「政治漫画」にも用いられている。「政治漫画」に登場する人物が一人ないし二人であることは、上述した「政治」という大きなテーマを認知させるために「特定できる人物」を選択することの結果である。こうしたことを考慮すると、このような、「政治常識」と「特定の有名人」（当事者）に訴えることによって、「政治」をまず読み手に認知させ、次いで「参院選挙」を意識させることが「政治漫画」の特徴として位置付けることができるのである。

「参院選挙」とこの時期のトピックがどのようにに関連しているのかを「政治漫画」を個別具体的に検討する。

（01・7・7）においては、料理人の小泉首相が「骨太」料理を候補者に出すものである。「地方の不安」（7・7M）という記事に対応しており、地方交付税の削減や道路財源の一般化による地方のうまみの減少が、自民党の地方選出議員にとつて脅威であることを示している。料理の比喩は、首相及び党首が候補者に対してどのようなまみを提供するかということを示す反面、権力関係を下地にして（高級料理店における普通の一見客と料理人との関係を想起せよ）「出たものを食べさせる」という意味をも持たせることができる。候補者の「苦虫を噛み潰した」ような表情に、料理人との関係が象徴されている。

また、この七月七日の「政治漫画」キャプションは候補者の本音が出たものであろう。実は、この「政治漫画」の内容は、この分析期間には含まれていない「政治漫画」（01・8・1）と対応する。八月一日の「政治漫画」は

ダルマがプールでターンをするところを二つの画面にして描いている。ダルマはタッチ（選挙に当選する）するまでは「小泉改革」の襷をかけ、ターン（当選後）したら、襷を脱ぎ捨てて「背泳ぎ」で泳ぎ始める。しかも腹に記してある「改革への」抵抗の文字を公開している。自分の党の党首から突きつけられたジレンマを、「寝返り」によって解消する「政治的な」関係の奇妙さが、(01・7・7)と(01・8・1)の「政治漫画」においてよく表われている。

「小泉人気」の勢いのよさを象徴する「政治漫画」が、(01・7・13)と選挙結果が判明した後の(01・7・31)の二枚である。前者は、ボード「改革」の銘入りを小脇に抱えてサーフィンをする小泉首相を描いている。これは、公示日(七月一二日)にあわせて主要候補者に「朝日」が取ったアンケートにおいて、小泉路線支持が与党は九三パーセント、野党でも二三パーセントを占めるということが、サブ・テーマになっている。サーフィンをする首相を画像の上部に大きく描き、「参院選」の文字のある「国会議事堂」を左下に小さく表している。こうした「配置」における対比によって、小泉内閣が参院選において予想する結果がどのようなものであるのかがわかる。またそれを生み出す「人気」の高さが波の大きさに象徴されている。

(01・7・31)は、小泉「ライオン」が生じさせる「風」が、小泉人気とそれによる選挙結果の威力を表し、対照的に社民党と共産党の退潮を、その「風」に吹き飛ばされる土井・志位両党首を描くことによって表している。自民党は改選議席の半数(六一議席)を単独で超える六四議席を獲得し、社民党と共産党は議席を減少させ、特に社民党は選挙区選挙の当選は一人もいなかったほどの衰退であった。「表」のたてがみをもつ「ライオン」キャラクターの小泉首相に蹴散らされたことになる。この「ライオン」が牙を向けて社民党と共産党を襲っていないことにも着目すべきであろう。この「ライオン」は、社民党と共産党に対して、笑顔で対応している。この「笑顔のライオン」は選挙の勝利によるものだけでなく、そもそもこの小泉「ライオン」は、野生の「ライオン」ではなく、

イメージキャラクターのそれであるからではないかと推測される。加えて、「票」をたてがみとする「ライオン」が「扇風機」の働きをしていることは、自ら起こした「風」でなく、周囲から集めてきた「風」であることを示している。周囲の「人気」という他律的な要素によった結果であるとすれば、「ライオン」はみずから戦う必要はなく、「風」（＝キャラクターに象徴されるような好感に基づく「人気」）に任せていれば十分だったのである。

中央紙（朝日新聞）の「政治漫画」で表現された、小泉内閣に関するイメージが、地元紙ではどのように表わされているのかを以下で明らかにする。

（01・7・7）のジレンマに悩む地方議員の姿を記述するのに、地元紙では、「与野党にねじれも」という表現を用いて、神奈川県選挙区の立候補者による参院選公開討論会の模様（01・7・2）を紹介している。郵政民営化について自民党候補者でも、郵便のみにとどめ、貯金・保険は公社が限界と述べるなどどいが見られることを指摘している。さらに、（01・7・4）では、「小泉流風の正体」という特集記事で、「大モテ地方議員」という見出しをつけ、小泉首相の地方遊説第一弾として横浜市で行う決起集会の入場券に応募が殺到し、窓口役の地方議員への入手依頼が絶えないことを紹介している。この記事などは、地元議員が受ける小泉人気への「うまみ」の面を強調したといえる。

（01・7・13）の公示日における「政治漫画」に表われた、「小泉人気」というテーマは、中央紙と歩調を合わせる格好になっている。「朝日」が公示日に調査結果を掲載したのに対して、「神奈川」は六月二五日に行った「共同通信」の調査（参院候補者アンケート）を公示日に先駆けて紹介している（01・7・4）。それによれば、「道路特定財源の一般化に六〇％が支持」という見出しを掲げ、小泉改革に野党が理解していると報じている。しかし、本文をみると、道路財源に関する一般化について、自民党候補の支持は二四パーセントにとどまっており、相変わらず与党の候補者のジレンマをみることができる。「朝日」の調査が与野党含めた好意的態度を表わしているのに

対して、「共同通信」調査を引用した地元紙は、「小泉人気」の野党への浸透と与党への負の浸透という、二つの影響のうち、前者のみを強調している。ここにおいても、地元小泉支持のフレームが推測され、このような見出しの設定が生じたと思われる。

また、「神奈川」は、公示日前の七月一〇日に再び「共同通信」の調査を掲載している。参院選挙の公示日前から投票日直前までの、有権者の意識の変化を全国的規模の三度の電話調査によって明らかにする、「トレンド調査」の一環である。その結果(第一回目)を、「自民に投票三四%」「七六%が与党過半数を予想」と表記した。このように、「朝日」に比べて公示前に「小泉人気」の実体を詳細に具現化しようとしているとみられる。「共同通信」は地方紙の情報源のひとつであり、これを直接地元紙の属性と見ることはできない。しかし、調査結果の公表の「時期」やデータの解釈において、記載した新聞社の独自性を推定することはできよう。

以上の例は、地元紙が小泉首相に好意的なフレームを記事に内包していると想定しているものであった。方向性が異なる記事を併記して、こうしたフレームを払拭しようとする記事も見られる。たとえば、(01・7・26)の「政治漫画」が表わすテーマにおける地元紙の扱いの中にこの傾向が見られる。この「政治漫画」は、帆に「参院選」「KOOZUMI」の文字が入ったヨットに乗って大海原を航海する小泉首相の前途に、「靖国参拝」と「株価低迷」の暗雲が漂うものである。選挙や疑獄事件など政権を左右する出来事に臨むときに、船(舟)による航海のシンボルは「政治漫画」の常套手段であるといつてよい(「造船疑獄」の吉田茂、「ロッキード事件」の三木武夫の描写にもこのシンボルが使われている)。この暗雲となっている「靖国参拝」について、「朝日」は、田中真紀子外相が東アジア諸国を訪問した際、中国と韓国の外相にそれぞれ「(首相の)靖国参拝再考を要求」「中止を要請」されたことを一面で伝えている(01・7・25/01・7・26)。これに対して、「神奈川」は、七月二五日の一面で日中外相会談にふれ「参拝中止迫る」としたが、同じ一面の上部に、「総理として靖国参拝」と答えた首相の発言を、



大きな文字で掲載している。また、韓国外相の場合は、翌日の一面で教科書の再修正要求について「靖国参拝の再考」とあるだけである。こうした「小泉擁護」に近い記事が掲載されたその日の「表層深層」という特集記事で、「近隣外交でビジョン欠く」「内外で広がる危機感と困惑」と述べており、通り一遍の「小泉」支持の立場では地元紙は無いということがわかる。

#### 4 森内閣と小泉内閣

上で個別に検討した、森内閣と小泉内閣における「総選挙」「参院選挙」をテーマにした「政治漫画」を比較すると、次のような特徴が主に見出される。

まず第一に、首相としての「人気」は対照的であるが、「政治漫画」の注目度においては互いに遜色がないことがあげられる。(00・6・7) ないし (00・6・23) にみられる森首相の「疎外」と、(01・7・7) における自民候補者のやりにくさの比較にみられるように、「選挙のやりにくさ」においては、森・小泉両首相とも自民党候補から見れば同じである。「失言」首相は、存在そのものが全ての自民党候補にとってマイナスとなり、「改革」首相は大半の自民党候補にとって「変説」ないし「変節」の擬態を余儀なくされる。この点で、候補者受難の党首であることは共通である。しかし、既に見たように、森首相はその「失言」による「疎外」(解散後もういっつか失言が問題視された) のゆえに、「改革」シンボルとそれによる「世論」の支持を受けた小泉首相と同程度およびそれ以上の頻度で「政治漫画」に登場していた。「政治漫画」においての「支持率」は、小泉首相を凌いでいたのである(森七六パーセント、小泉七〇パーセント)。なぜこのようなことが生ずるのであろうか。

まず、「政治漫画」における首相の持つ役割がある。現在の政治状況を解説・評論するには、読み手にそうした状況を認知してもらわねばならない。加えて、一齣で政治状況を解説するためには状況把握にいくつもの伏線を張

る余裕がない。それには、議院内閣制においては、内閣総理大臣がもつとも「日本の政治」を象徴するのに適しているのである。すなわち、そもそも世論調査で人気があるうとなかろうと、首相を軸にした「政治漫画」を描かざるを得ないともいえる。

次に、小泉首相はまれに見る高支持率で、森首相はそれとは対照的な支持率でどちらも「特異性」という点でそもそも「ニュースバリュー」があつたとみることができる。とくに森首相については、「政治漫画」の持つ体制批判の性質が、描く対象としての森首相の認知対象度を高めたとみられる。むしろ「選挙」というテーマにおいては、高支持率はかえって「描きにくい」ものではなかったか。なぜなら、公示以降のいわゆる「選挙」活動をする描写は、森首相の四回に対して小泉首相は一回もないからである。時の権力者を「笑う」ことによって権力の相対化をはかることが「政治漫画」の大きな特徴の一つであるとするなら、読み手である「国民」の声の大きさに「政治漫画」は従う必要があるからといってよい。

第三に、先に指摘した、批判の対象の顕出性の高さに関連して言えば、「参院選挙」と「総選挙」の意味付けの違いが考えられる。すなわち、国民の直接、短期的な現実問題の解消および政権の正当性(妥当性)の確認として「参院選」とは微妙な差異が「総選挙」にある。支持率の低さといくつかの「疑義」(政権成立時、様々な「失言」などに関する)によって、政権維持は限界とメディアが判断したために、森首相の顕出性が高まった。逆に小泉首相は、「参院」選挙の勝利が確実視されていたから、あえてテーマとしてとりあげなかったとみられる。

第四に、野党の影響力の違いがある。両内閣時にはともに野党の影響力は必ずしも大きいとは言えない。しかし森内閣から小泉内閣に至るにつれて、野党の影がますます薄くなつてきている。たとえば、森内閣時には、公示日に、政策論争の問題として十全に機能していないので泥沼化しているという指摘として、全政党が登場している(00・6・13)。さらに、投票日においても(00・6・25)、森首相の「失言」から派生した「催眠術ボケ」に、「ツ

ツコミ」として民主党党首が登場している。これに対して、小泉内閣になってからは、投票日（01・7・29）に、まるで「明るい選挙推進委員会」のポスターのように与野党オールキャストで投票をよびかけるにとどまっている。公示日以後投票日まで、報道の中立性に神経を尖らしたためか、特定政党への利益となることを「自粛」しているようにみえるとはいえ、批判対象の俎上にも登場せず、与野党の対決姿勢を示すものすら見当たらない。世論調査でも与党の優位が伝えられ、「改革」シンボルが与党内批判とも解しうるものとなって対立すべき争点すら提示できない状況を、「参院選挙」における「政治漫画」の野党の登場機会の少なさは反映しているといえよう。

「政治漫画」にみられる森・小泉首相の比較の特徴として、付加的ではあるが指摘できる点は、まず、ステレオタイプ」的表現については違いが見られないということである。「選挙」を象徴する事象が森首相時には九種類（名簿、街頭宣伝車、マイク、拡声器、タスキ、立会い演説会、馬鹿殿・姫、サウナ）小泉首相時には九種類（タスキ、選挙対策本部、看板、ポスター、ダルマ、国会議事堂、街頭演説、ヨットの帆、選挙運動スローガン）と全く同じ数である。「タスキ」と「ダルマ」は特に「定番中の定番」で、他の選挙を描いた「政治漫画」にも複数回登場した。「総選挙」の時に街頭と立会い演説のように、演説の描写が若干多かったのは、先に示した「失言」がキーワードになっていたことと関連していると考えられる。さらに、数では同じだが、重複するものが三つと少ないのは、上記のような首相の個別事情やパーソナリティと関わりがあるためであると推測される。また、これらのシンボルは単独では使用されず、人物や文字情報との組み合わせによって用いられていた。これは、両首相の「背景」として用いられることが多いことを示しており、ここにおいても「政治漫画」における人物の重要性を示唆したものである。

付加的特徴の第二点として、投票日と開票結果確定日の「政治漫画」が対照的であったことがあげられる。投票日と開票結果については、掲載ローテーションの関係から投票日当日が日曜日となり、漫画家が固定され、開票

結果は翌々日の火曜日掲載の作品に表われる。それゆえ、投票日というテーマで毎年異なった作品を描かねばならない漫画家は、かなりの技量が試される。二〇〇〇年では、森首相の「人柄」と「失言」をクロース・アップさせて、与党の行く末の危うさを出していた。これは、開票結果でも同様であり、与党三党で辛うじて多数を確保したところに「第二次森内閣」の来し方行く末が案じられている。これに対して二〇〇一年の「参院選」では、与野党党首全員参加して、投票の呼びかけを行っている。ここには、小泉首相の政権の不安定性は読み取ることができない。開票結果については、「総選挙」では、多数確保の与党に対照的に存在する野党の存在と責任は見えてこない。「参院選挙」では、社民と共産という事実上ミニ政党となった政党と与党との接触であり、「野党第一党」が登場していない。野党の衰退もここに見ることができる。

#### IV 結論と課題

二〇〇〇年六月と二〇〇一年七月に行われた、第四二回衆議院選挙（「総選挙」）と第一九回参議院選挙（「参院選挙」）がそれぞれ時の政権（第一次森喜朗内閣、小泉純一郎内閣）のどのような属性を反映しているのかを、当該時期に掲載された「政治漫画」をもとにして、明らかにしようとした。

第一次森喜朗内閣と「総選挙」との関係については、森首相のパーソナリティーに関連するものが多く、特に「神の国」「国体」「無党派層は寝ていて」などの発言が「失言」として認識され、自民党候補者から「疎外」されるという点に集約されていた。地元紙である「北國新聞」は、こうした「疎外感」を払拭しようとバランスの維持に努めていた。

小泉純一郎内閣と「参院選挙」との関連では、「政治漫画」は彼のパフォーマンスに基づいた「人気」が「改革」シンボルと連動して生ずる影響についての言及が中心となっていた。地元紙である「神奈川新聞」は、森首相と

「北國新聞」との関係とほぼ同様の関係がみられた。

二つの選挙を通した、森内閣と小泉内閣との比較では、人気に関わらず首相の登場数には差はない、野党の影響力の衰退が一見対照的な印象を両内閣に与えた、という点が明確になった。

ここで「政治漫画」のもつ問題点について言及したい。同一派閥から連続して輩出された首相が、一見対照的なイメージを発したことにメディアが少なからず関わっている。世論調査における内閣支持率があたかもゼロサムのような数値を打ち出しているにもかかわらず、選挙結果は——大勝、辛勝という差はあるにせよ——与党の勝利に終わり、両政権は維持され、これによって内閣の正当性は確認された。特に小泉首相の「描写」において、「政治漫画」はその本来の機能の半分も作用しなかったのではないか。このとき「政治批判」の対象は「政治漫画」では誰であったのか曖昧であった。「改革」シンボルの提示によって、与党内部にも攻撃対象が設定されたとき権力関係が「多元化」したため、与党＝体制＝批判という「白黒はつきりさせる」大衆社会論的二分法しかない、「政治漫画」では対応できなくなった。これでは、世論調査に表われた「何となく期待できるから」という国民の漠然とした小泉首相イメージのみに追従し、小泉首相の提示する「改革」シンボルに全面的に賛同することと同じである。これは、「政治漫画」が自らのわかりやすさのみに焦点をあててしまったことに起因する。本来「政治漫画」には「是々非々」の姿勢が内包されていた。権力をもつ人々を風刺し、「笑う」ことによって政治批判をおこない、読み手である一般の人々の視座を代弁する。このことは、「笑い」を通じてその主体みずからをも「笑う」自己批判、自己対象化の役割を含んでいる。政治家への笑いがメディアないし読み手自体に伝わってこないといけないのである。それによって、「多元化」の呪縛から人々を解き放つ「脱構築」が行われる。では、どうしたらそれが可能になるか。ひとつには、「社会の木鐸」としてのジャーナリスティックな役割の再構築——大衆迎合でも乖離でもない——をめざすことであり、具体的には「国民」「市民」「庶民」の神格化をやめ、「政治漫画」において批判の対象とすべきこと

があげられよう。「政治漫画」分析にも、より精密な分析が求められるのはいうまでもない。「笑い」の客観的分析手法を考察する必要がある「政治漫画」分析には求められる。

参考文献

- Bateson, G. (1972) *Steps to an Ecology of Mind*, (Brockman). (= 2000, 佐藤良明訳『精神の生態学』、新思索社).
- Cottle, S. (1998) 'Analysing Visuals: Still and Moving Images' in A. Hansen, S. Cottle, R. Negrine, and C. Newbold *Mass Communication Research Methods* (Macmillan Press).
- Goffman E. (1974) *Frame Analysis*, (Northeastern University Press).
- Harrison R. (1981) *The Cartoon : Communication to the Quick*, (Sage Publications).
- Hartley, J. (1982) *Understanding News* (London: Methuen).
- 茨木正治 (1997) 「政治漫画」の政治分析」(芦書房)。
- 鳥谷昌之 (2001) 「フレーム形成過程に関する理論的考察——ヒトース論の統合化に向けて」(『マス・コミュニケーション研究』58号) 78—93頁。
- Medhurst, M. J. & Desousa M. A. (1981) 'Political cartoons as rhetorical form: A taxonomy of graphic discourse', *Communication Monographs*, 48, 197-236.
- Riffe, D. Sheed, D., & Van Ommeren, R. L. (1985) 'Behind the Editorial Cartoon', *Journalism Quarterly*, 62, 378-383, 450.
- ..... (1987) 'Deciding the Limits of Taste in Editorial Cartooning', *Journalism Quarterly*, 64, 607-610.
- Smith H. L. (1954) 'The Rise and Fall of Political Cartoon', *Saturday Review*, May 29.
- Streicher L. (1965) "On a Theory of Political Caricature," *Comparative Studies in Society and History*.
- 竹下俊郎 (1998) 「メティプの議題設定機能」(学文社)。
- Tuchman, G. (1978) *Making the News: A study in the construction of reality* (New York: The Free Press).